



ロータリー2510地区月例報告 Vol.3

ストライキ。日本に馴染みはなく、自分に関係なければ好奇心が掻き立てられる甘美な響き。そんなストライキには英国に来てからすぐに邂逅した。その時は一部の路線が使用不可能になる鉄道のストライキだった。鉄道ストライキにも様々な規模があるようで大規模なものだと自分の乗っている路線が影響を受けて学校に行けなくなる。11月には大規模な鉄道ストライキが起きて学校から近場の場所に住んでいる人でさえ学校に来れなくなる事態になり、急遽、会議がZoomでの開催に切り替わった。ストライキといってもその日に突然起きるわけではなく、事前に日程が知らされどの区画が影響を受けるかは知ることが出来るため、予定を調整することは比較的簡単だ。少し不便だなあと思うだけでそんなに影響はない。

他人事だと思っていたストライキは大学にまでやってきた。11月の始めに大学の事務からストライキに関するお知らせが届き、詳細は随時更新していくとの連絡が入った。大学職員の労働組合組織(University and College Union)が英国全体の大学でストライキを開催することを決定し、英国の150以上の大学がこのストライキに関係し約250万人の学生がこのストライキで影響を受ける試算であった。この動きを決定付けた背景は大学職員の年金を平均35%カットする決定と、近年のインフレに対して給料の値上げが追いついていない状態だった。ストライキでの要求は、年金に関する決定を取り下げること、大学職員の給料を上げること、不安定な短期雇用を是正することが主だったものであった。ストライキに参加した教職員はその分の給料が差し引かれるため、それだけ現在の状況を改善したいと思うほどの労働環境であるということだ。余談だが僕の在籍するLSHTMは全大学の中で英国の放送大学に次いで短期雇用の割合が多い大学であった。

ストライキは11月24,25,30日に行われた。僕に関しては、24,25日の授業は対面からオンラインになったただけだった。30日に関しては一日に予定されていた授業が全てキャンセルされた。学校生活が大幅に崩されるほどの甚大な影響があったわけではなかった。今はオンラインでの資料や授業開催、録画された授業にアクセス出来るのでストライキの影響は限定的になりつつある。

英国のストライキで特徴的なのはPicket lineだ。ピンク色がシンボルカラーで、大学の場合、正面玄関に陣取って、道行く人々になぜ彼らが立ち上がらなければいけないのか状況を説明していく。大学に入ろうとする人に対しては、ストライキに協力するように呼び掛け、今日は大学に入らないように説得していた。LSHTMではそんなに人はいなかったが、University College Londonの正面玄関では大勢の人がたむろしていて非常に入りにくかった。裏口には人っ子一人いなかったので入ろうと思えば幾らでも入れたが、学生の方でもこのストライキに賛同する呼び掛けがあって修士の学生としての署名活動も行われた。

11月はReading weekという個人の勉強に集中するという名目の1週間休みがあった。その期間に母親が英国に来た。いとこがルフトハンザドイツ航空のニューヨーク支店に勤務している関係で親族は破格の値段でチケットが取れる(悲しいことに僕は該当しない)。具体的には日本、フランクフルト、英国経路のビジネスク



写真1. LSHTMでのPicket line.

ラスが往復で16万円程度。エコノミーなら5万円程度といていた。ただそんなに都合の良い話もなく、チケットは搭乗直前で席が空いていたら載れるというものだった。そのせいで直前まで結局、英国に来るかも分からずビジネスクラスに乗れるかも分からなかった。帰りに至っては結局、予定日は埋まっていたため2日ほど延長した挙げ句、エコノミークラスで帰っていった。国際航空会社に親族が誰か一人でも務めておくと世界への旅行がたくさん出来るということだ！

母親が来た関係もあって11月はロンドンの主要な観光地を巡った。具体的には、London Bridge, London Tower, Westminster Abbey, British Museum, Natural History Museum それとApolo theatreでWickedというミュージカルを鑑賞した。またケンブリッジ観光もした。見てまわった感想として、英国は大学と博物館、美術館の荘厳さが凄い。オックスフォードとケンブリッジは大学も壮大な建物と敷地を備えた大学が所狭しに並んでおり、歴代の為政者が大学への出資を潤沢な程行っていたことが見て伺える。博物館と美術館も同様だ。小細工なしで豊富な資料を余す所なく見せつけている印象を受けた。そのため、個々の展示物の解説は往々にしてなかつたりするが、それを補うだけの展示物の量と種類があった。この小細工なしで長所や特技を見せつける傾向はミュージカルでも同じだった。Wickedは主人公キャラクター2人がひたすら甲高い声で長時間力強く発声する場面が何度も何度もあって、その度に観客が激的な拍手と歓声を送ることを繰り返していた。確かに歌唱力は凄まじかったが、ダンスや小道具の精巧さは日本の劇団四季の方が上だと感じた。



写真2. CambridgeのKing's College